

文化高知 30

高知の熱帯夜

古橋賢造

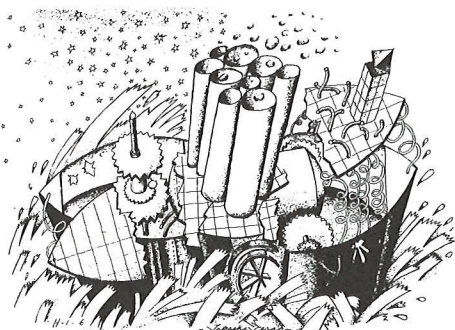
異常気象とは、三十年間に一度起こるか起こらないかというまれな現象」と気象庁では定義している。高知地方気象台で気象統計をとり始めたのは一八八六年であるから、すでに百年以上になる。

高知の統計記録の第一位を更新する、つまり百年に一度の異常現象は、ここ一、二年でも結構多い。

昭和六十三年四月十二日から十三日の二十四時間降水量二〇七・五mmは、四月での一位である。六月二日の二十四時間降水量二九三・五mmと日降水量二六五・〇mm、六月の月降水量の多い値九三〇・五mmはいずれも第一位である。逆に降水量の少ない記録も更新されている。十月の二三・五mmと十二月の〇・〇mmがそれである。平成に入ってから一月には月平均気温九・〇℃と高いほうの歴代一位である。

このように見てくると、近年は異常ではないかというふうに考えがちである。しかし、世界の異常気象の数はここ五十年間の統計を見ても大きな変化はない。ただ、昨年のようにアメリカ中西部のような穀倉地帯に異常が起き

ると、世界の食糧事情に影響するので、大きく取り上げられるのである。最近、二酸化炭素などの温室効果、気体の増加による気温の上昇が問題に



「SOS」 寺尾孝志

なっているが、これを反映するかのようには、異常気象の数はトータルでは変わらないが、異常高温が異常低温より多く出現する傾向がはっきりしている。

県下には、西から宿毛、清水、室戸岬の三測候所があり、清水測候所の観測は主として足摺分室で行われている。統計年数がそれぞれ異なるので極値の比較はできない。しかし、一九五〇年から一九八〇年の三十年の平均を平年値として共通している。

高知、室戸と足摺を比較すると、最高気温が二五℃以上の夏日はそれぞれ一三九・九日、九一日、一一一日で大差はないが、最低気温が二五℃以上の熱帯夜はそれぞれ五・九日、六・四日、三八・二日となり、足摺の熱帯夜の多さが目立つのである。

最近、都会において熱帯夜の増加が目立ってきている。たとえば東京の八月の日最高気温の十年間の月平均値は、一九二〇年代と一九七〇年代では三〇・五℃とほぼ同じなのに、八月の熱帯夜の日は二・六日から九・六日に増加している。

高知では、はっきりした傾向は出ていないが、クーラーの廃熱は都会の夜を冷やすことはない。自然環境を守り、優先する都市づくりが望まれる。

(高知地方気象台長)

元吉恵子「オペラと最近では言われませんが、私は歌なら何でも大好きで、童謡はじめ流行のカラオケ等もいっぱいうたって、思いっきりストレスを発散しております。でも、みんなとても上手でおいついでいかなんです。特に、若いタレントのうたうリズムのある歌……あの手の曲は苦手です。それと、何年たつてもカラオケのレパートリーがふえないのが私の悩みの種で、聞き覚えができない。やはり目の前に楽譜がないと心配で、要するに人前で恥をかくのが怖いのだと思います。

音楽教師は音楽をする……できる事が当たり前のことなのです。別の仕事を持つて人々が音楽することは大変なことなのに、いとも簡単にしかも音楽を心から楽しんでますね。とつてもうらやまして仕方ありません。私たち、音楽を職業とする人々は意外と「音が苦」になっているようです。淋しいことです。気軽に音楽と音楽する人々を尊敬したい私です。

考えてみると、いつ頃から歌をうたっていたのでしょうか？ 気がついたら、自分の喜怒哀楽を全て音楽にして過ごしてきたように思います。元来のんびり屋で天真爛漫の土佐のはちきん女性でありまして、一度やり始めたたら気がすむまでやり通さな

いと治まらない。好きだけで始めた歌への情熱は、一人の少女を田舎のたんぼの中から、イタリアオペラの殿堂スカラ座の研究生として勉強することを許可され、世界の舞台にたせのすから、両親はじめ近所のおじさん、おばさんは、あっけにとられてしまったのです。

昭和四十七年より五十四年までの六年四カ月の留学生生活は、振り返る

歌は私のいのち

元吉恵子

子の実」を独唱することになりました。文化センターは外人ばかり……独特な異国の雰囲気の中で私は、「いつか外国でうたってみたいなあ」と夢を抱きました。

夢が現実となって憧れのベル・カントの本場、イタリアに留学することができました。念願であった歌の国のイタリア人は

Mangiare (食べること)

間もないくらい無我夢中でしたから、ホームシックなどにかかる事もなく、必死で過ごしてしまいました。

故郷高知での一時帰国リサイタル、新装なった県民文化ホールで「蝶々夫人」をうたうことができましたのは、私にとってこの上もない喜びであり、何物にも代えることのできないものでした。

昭和四十年、世界ジャンボリーが津山市で行われ、その席で私は「柳

Cantare (うたうこと)
Amore (愛すること)

と、この三大人生観を満喫してました。明るく陽気な楽しい人々は、おいしいイタリア料理を愛する人と食べ、その喜びを歌にして、心いっぱい、体いっぱいになりたい、レストランではカンツォーネにオペラのリア合戦が夜遅くまで続きます。生活をエンジョイしているのですね。イタリアに生活し、勉強し、演奏で

きたことは、私の青春であり貴重な経験でした。

音楽は自分の体が楽器であり、それを自らが演奏します。何よりも、まず健康であることが大切です。歌は、声を磨いて人を感動させる美しい声を作り、美しい心、素直な心で聴衆を感動させるようにしなくてはなりません。素直な心や美に対する鋭い感受性が本人になくては、貧しい品性のない音楽となり不快感を与えてしまいます。芸術は、技術だけでなく聴く人の心を動かし深い感銘を与えることが大切なのです。コンサートが終わった後、まっすぐ家路に着きたくなくて、ワインを飲んでおしゃべりしたい……そんな歌がうたいたいんです。

無心にうたっている人をみたり、すばらしい音楽の感動を持った人々……まるで子供の心に帰ったみたいなんです。いつの日かそんな子供の心のわかる大人の歌をうたいたいものです。心の中にうたがあり、うたの中に心のふるさとがあるように思えます。

私の歌への限らない愛と情熱は生涯持ち続け、熱き血潮のあふれる歌をうたいたいと思います。だって、歌こそ私のいのちなのですもの。

オペラ・ソプラノ
作陽音楽大学助教授



魚梁瀬地区と馬路地区の二つの集落に分かれており、馬路地区には青年団がないのである。

昔、私たちは青年団に所属し活動していたが、結婚し、子どもができるなど次第に離れていかざるを得なかった。その代替として、馬路地区には二つのグループが存在している。農業関係の馬路農協青年部、林業関係の馬路村林業青年クラブである。

さて、この話を受けて、私は早速林業青年クラブ臨時総会を開き、みんなに意見を聞いた。すると、意外なことにもみんなが話のつてきた。チケット販売だけでなく、もっと積極的に取り組みたい。そして、せっかくなのだからコンサート終了後、お登紀さんと一杯やろうというのである。

会場は魚梁瀬ダム、我々は林業に従事していることもあり、ステージとなるイカダづくりを担当することになった。しかし、何分初めてのこと、巨大なイカダ(15m×30m)づくりの作業の内容で早くも行き詰まった。最初の計画では4mの丸太を数百本組み合わせなければならず、

手間がかかる上、安定感もない。再度検討した結果、15mの丸太でつくことにした。

材料の丸太は、営林局職員の協力の下に切り出しから自分たちの手でやった。また組む作業は「ヤナセフエステイバル」で毎年小さなイカダづくりをしている魚梁瀬地区の六人に手伝わってもらい、三月初めから作業にかかった。途中、丸太が湖面で安定しないとか、湖の上での作業で思うように作業が進まないなど多くの問題が出てきたが、その都度六人が頑張ってくれて素人の私たちを元気づけてくれた。そして、ついに三月十九日、魚梁瀬ダムに巨大なイカダが浮かんだ。

イカダの完成で、チケット販売にも一気に弾みがつき、青年たちが燃え上がった。四月二日を迎えた。

コンサート当日の我々の役目はイカダ周辺の警備。しかし、七千人という予定外の入場者に会場周辺は大混乱。男は車の整理に終始し、女の子は入場できないお客さんに噛み付かれ泣き出す始末。混乱の中、気が付いた時にはすでに日が暮れようとしていた。

繁多な一日が終わり、お登紀さんとの交歓会、マイクを握ったお登紀さんが「私のコンサートのためにこ

んなに頑張ってくれてありがとう。私の歌を聞けなかった人のために歌います」と「十八の頃」を歌い始めた。この時初めて、コンサートは成功したのだと思った。私は目頭が熱くなった。

イカダに夢を託して中芸五カ村の青年たちが燃え上がったコンサートは終わったが、これに取り組んだ三十数人の青年たちのつながりは強い。私たちはこれからも、中芸地区の発展に大いに協力しなくてはと思わずにはいられない。

(馬路村林業青年クラブ部長)



心を組む

—組紐に魅せられて—

小嶋博子



IMAGE
高知新聞社撮影

「組紐」、この耳慣れない世界に、私は魅せられ、のめり込んでいます。着物を着るとき、最後に結ぶ小さな紐、帯締め。一見何でもないこの一本の紐が帯自体を留め、しかも着物姿を上品に見せたり粋に見せたり、幅一センチくらいの紐で大きく変わります。

紐は、太古の昔より、それぞれの時代に於いて、脇役でありながら、必要不可欠な存在として長い歴史を重ねてきました。

組紐のルーツともいうべき縄文時代。遺跡から掘り出される土器の小さな片に紐の跡が残されています。

位階を表すための紐（篠帯）や、横刀を下げる平緒にみられるように、組紐の文化が最も華開いた飛鳥・大和・平安時代。正倉院の宝物の中に

ち組紐を学ぶ者にとっては、あこがれの紐です。

鎌倉・室町時代の武家社会に於いては、鎧・冑など武器になくはならないもののひとつが組紐でした。

大山祇神社（愛媛県・大三島）や御嶽神社（東京都）

の鎧は、武器というより、見事な芸術品を見る思いです。また、この時代は茶道具にも良い紐が残されています。

比較的平穏な時代が続いた安土・桃山・江戸の頃は、女性の帯や、装いに彩りを添える小道具として使われることが多くなりました。

衣生活が大きく変わった今は、帯締め・羽織紐・袋

すばらしい紐の残欠を見た時、気が遠くなるような複雑な組み目や現代にも通じる色彩は、とても脇役とは言えない存在感のある紐ばかりで、当時の高度な技術とセンスに敬服してしまいました。

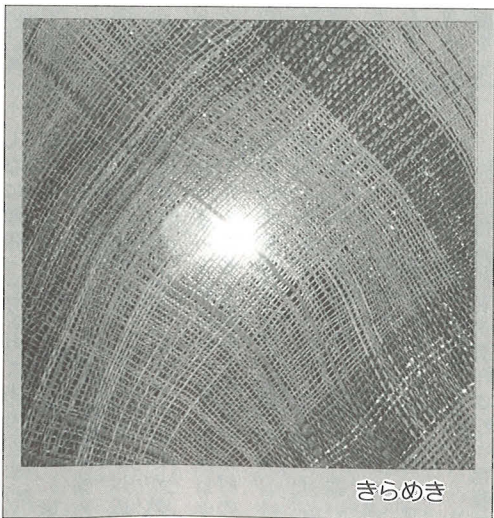
また、厳島神社（広島県）の平家納経の紐、四天王寺（大阪市）の懸守の紐などは、私

物の紐などにわずかに用いられるばかりになったように思われますが、一方で、洋感覚のアクセサリーやインテリア、そして産業用に使われる事も少しずつ多くなってきています。最近、私が入り組んでいる「和紙を組む」という事も、ある意味では時代に要求された組紐の用途のひとつだと思っています。

◇

◇

伝統的工芸としての組紐の魅力に



きらめき

ひかれ、この道に入り十年余り、どうしてこれ程までに、私の心が「組紐」のとりこになってしまったのか、今改めて考えてみました。

絹糸の美しさ。色と色が組み合わされ、別の世界がつけられていく彩りの魅力。紐を組む時、全ての糸が平均して組まれてはじめて、調和のとれたよい紐が出来上がります。そのようなすを、私たちの日々の生活に置き換えて考えてみる事が時々あります。人と人が気持ちよく生きてい

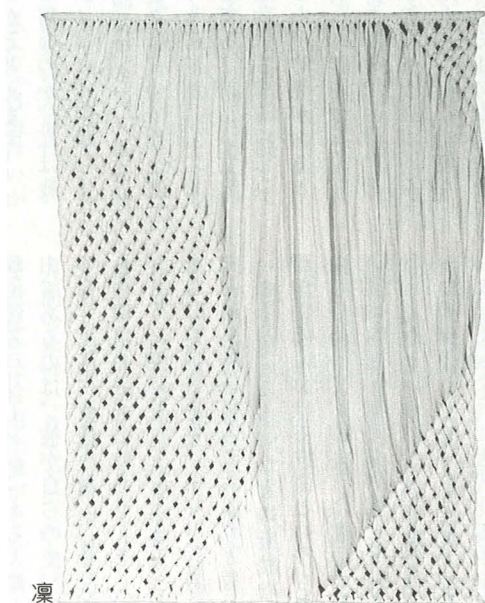
くために、組み目と同じように、それぞれが自我を抑え、周囲との調和を考えていけば、素敵な人生が組み上がるのではないのでしょうか。

かつて、家元より「組乱即心乱」という言葉を頂きました。その言葉を、私は人生訓のひとつとしています。心乱れず、自分自身を見つめ、確かめ、高めるために、組紐が役立つよう組むという行為だけにとらわれず、自分の心を映す作品を創っていきたくと思っています。

ない魅力があります。和紙は、絹糸にない素朴さと可能性を持っているように思われ、和紙ともまた、離れた気になります。

一つの作品が出来ると次の作品、また次の作品と、次々作品が発展していつてくれるのもうれしいことです。

和紙の糸には張りがあり、絹糸では出来なかつた立体的な作品が出来ました。そして、紙を糸にせず、紙のまま使ってみると、大きい作品が出来ました。組んだ部分の力強さと紙そのものの持つ柔らかさとの対照。高知の自然を表現するのに、この紙の柔らかさと力強さがぴったりでした。



凜

将来は、紙を漉くことから自分で手がけ、自分の漉いた紙を使って作品を創ってみたいと、気持ちは大きく膨らんでいます。

そして、もうひとつ続けていきたいのが、「和紙」と「あかり」を使った作品です。和紙を透かすと、「あかり」はとても柔らかく、やさしくなります。一方あかりを与えられた「和紙」は、生命を吹き込まれたかのように、生き生きしてきます。あかりひとつで、様々な表情が変わるおもしろさ、不思議さ。時には宇宙を旅しているような、時には深い海底にいるような、現実とは別の世界に引き込まれる事があります。「和紙」と「あかり」、それに「音楽」を組み合わせる事で、私のひとつの世界を創ってみたい。こんな事を夢見ています。

（組紐作家）



そして二年前、和紙の糸と運命的な出会いをしました。それまで、絹糸かそれに近い化学繊維の糸を用いて組むのを当たり前に考えていた前で、この和紙の糸との出会いは、それからの私の作品を大きく変えてくれたという意味で、まさに運命的だと思います。

絹糸には、絹だけにしかない糸の美しさがあり、組紐を続けていく上では一生離れられ

高知市文化振興事業団発足5周年記念文化講演会

日本の自由、世界の自由

京都大学総長 西島安則

坂本龍馬のつくった歌に「世の人は我を何とも言わば言え、我がなすことは我のみぞ知る」というのがあります。龍馬のこころ意気とともに、自由というものの中にこめる独創、孤独、個人の重要性に対する心境が窺えます。自由という言葉の中には、外に向かつての自由という概念と、自分の心のなかに向かつて、自分が本当に何を考え何をしようとしているか「我のみぞ知る」と言い切れる心の自由がなくてはならないのです。

えま。龍馬が亡くなった明治元年に、海援隊によって刊行された『藩論』には龍馬の思想として「天下を治め国家を治むるの権はただ人心の向うところに期すべし」というのがありますが、これはもう譲夷論も開国論も越えて、わが国の近代化の道を示すとともに、現在にいたる世界の潮流を見定めた透徹した炯眼というべきです。

板垣退助も自由民権の立役者で、明治一五年岐阜で暴漢に襲われたとき「板垣死すとも自由は死せず」という名言を残して有名です。土佐に起こった自由民権運動が底流になって全国的政党の結成などの変遷を辿っていきませんが、ちょうど百年前の明治二二年に大日本帝国憲法が發布され、帝国議会の開設へと時代は移っていきます。

板垣退助も自由民権の立役者で、明治一五年岐阜で暴漢に襲われたとき「板垣死すとも自由は死せず」という名言を残して有名です。土佐に起こった自由民権運動が底流になって全国的政党の結成などの変遷を辿っていきませんが、ちょうど百年前の明治二二年に大日本帝国憲法が發布され、帝国議会の開設へと時代は移っていきます。

こういうふうな考えてきたとき、最初に申しました坂本龍馬の「この自由」と自由民権運動という「社会に自由を」という運動とは、根本は同じところから出ておつても、少し違うのではないかと考えます。自由とは果して何なのか。私は戦後間もないころアメリカに留学しましたが、一九五〇年代のアメリカ、とくにニューヨークは黄金時代を迎えて、音楽にしても、演劇にしても、ミュージカルにしても、新しい文化が生まれ自由を謳歌する素晴らしい熱気がございました。時間があるとよく「自由の女神」の像をフェリーに乗って見に行つたものですが、そのとき私は、敗戦の悲惨な日本から来た貧乏留学生として、何か複雑な感慨をもってこの「自由の女神」を見上げたことでした。

政治や革命では、自由という言葉が大きなドライブイング・フォース（原動力）となって世の中を動かしていきませんが、結局は強いもの、力を持ったものが満喫できる自由、そういう自由が強調されすぎてはいないだろうかと思つたのでした。今とは随分状況が違い、壊滅的な状況からにわかには輝かしいばかりのニューヨークに立って、若い日本の留学生が、あらためて自由とは果して何なのかと考えても不思議はなからうと思ひます。

しかし人間と社会に関する近代の思想の中で、最も重要なものはやはり自由で、それは圧倒的な迫力をもっています。二〇世紀のイギリスの政治学者パリンが「ある人間が自由であるのは、彼が自らの生、自らの命、生活に責任を負い、そして自らの環境の主人公であり、そして自らそうと決めたことをすることができるときだけである。そういう時にこそその人間は自由である」と言っています。こういふものを読むと、西洋文明における自由というものが、少し分かつてくるように思ひます。

別に西洋と東洋を画然と區別して考えようというわけではありませんが、一つの側面として、ヨーロッパを中心として起こつた近代化の中で叫ばれた自由のルーツは、たぶん日本や



ない支配を追求したのです。

そこで本当の自由の価値が求められ、それが本当に人間の本性に根ざすものであれば、自由は特定の階級に限定されるものではなく、全ての人々にとつても同じ価値をもつものでなくてはならないという考え方が成熟してきたのが、西洋における近代化の過程であります。そして自由は人間平等の原理と結びついていきます。これは東洋の自由、あるいは日本文化においてわれわれが心の中で感じる自由というものは、源が違います。ヨーロッパの「自由」について、近代への道程の中で一つの大きな役割を果たしたのがルソールですが、彼は「自分で自由を放棄する」ということは、それは自分で自分が人間たる資格、あるいは人間としての権利、義務をさえ放棄することである」と言っています。ルソールによって表現されている近代の自由は、人間の自然条件、人間の本性にかかるといふものであるという認識になっていきます。ここではじめて、民権あるいは民主主義という、人間とそれを治める権威との間の合意のあり方が逆転するのです。

ここまで思想が成熟してまいりますと、東洋における心の哲学と西洋

における「自由」の考え方が、大きく共鳴する時代に入ってくるのです。自由は東洋においても、西洋においても、歴史の中で成熟し、人類は自由に向かつて歩み、自由は歴史の目標となる時代になった、それが近代です。

しかしこうした考え方は、決してそのまま社会に受け入れられるものではありませんでした。人間を含めた自然と社会制度の間、あるいは一人の人間と社会的市民としての立場の間に大きなギャップがあつて、ルソールはこの理想と現実の矛盾について述べています。また「自由はいかなる政治の形態の内にも存在しない。それは求める人のこころのなかのみ存在して、それを人は到るところへ持つていくことができる」といふのです。ここまで見えてきますと、坂本龍馬の歌の心境とルソールの嘆きが、はつきり重なってきます。

ルソールが亡くなって十一年目にフランス革命が起こりますが、その精神的支柱になったのが彼の思想でした。そして一七八九年にフランスで最初の人権宣言がつけられ自由平等、国民主権、法のものとの平等、思想の自由が初めて明文化されるのです。しかし、この血を代償とした革命も、やがてナポレオンの軍事独裁による秩序が再建されて一つの帰結をみる

ことになります。

人間は生まれながらに自由平等であり、国家は人間の自然権を保全するためにあつて、主権が国民にあるという人権宣言の理想はどうなったのかと考えると、難しいもんだなと思ひます。

歴史というものは常に進歩するものでもなく、また単に変化しているものでもありません。そこには新しい創造、クリエイションがあつて、熟成していくのだと信じます。

さてこの二百年、自由は果たして人間の本性たりえたのでしょうか。また社会は自由を旗がしらとして成熟してきたのでしょうか。自由、平等、博愛はどう成熟してきたのか。もう一度そのことを、われわれはそれぞれが持つ文化の中で、あるいはその成熟の過程を踏まえながら考えてみる必要があるのではないのでしょうか。そしてそのこと自身が、日本の自由であり世界の自由であると考へます。

(文責 編集部)

文化振興事業団は発足5周年を記念して、去る五月二十四日、京都大学総長西島安則氏をお迎えしまして文化講演会を開催しました。これは、その時の講演の内容をまとめたものです。

中国あるいはインドの古い文明に遡っていったときにある自由の源とは、すこし異質のような気がします。

ヨーロッパの古い時代の自由は、例えばアテナイの自由主義、ここには自由を自分で持つことのできる自由人があり、一方に奴隷が存在してました。言い換えると自由人であるというものは、奴隷を所有する自由でもあつたのです。自分のサークルにおいては、自由と平等について理想的なあり方について論議をすると同時に、外に向かつてはあくこの

高知県

わがまち百景

高知市略図



① 石湍付近の町並み。江戸時代の参勤交代道で、今も昔ながらの土蔵や石垣などがあちこちに残って閑静なたたずまいをつくっている。



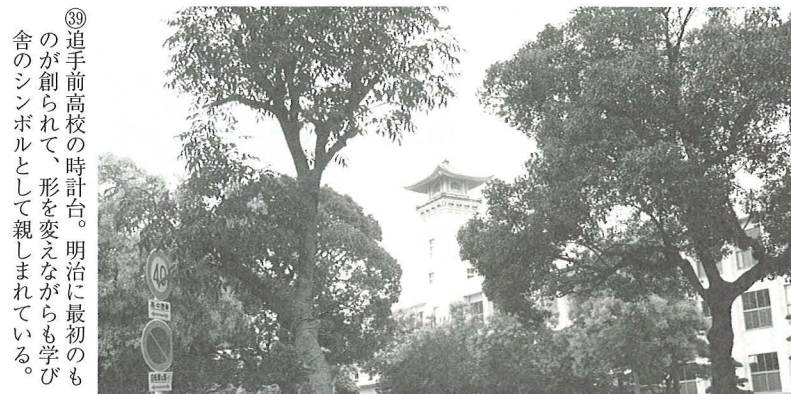
⑩ 浦戸湾内に浮かぶツツキ島、玉島・衣ヶ島。自然の植生をそのまま今に残し、昔日の浦戸湾が偲ばれる。

- ⑪ 丸の内高校と高知女子大学の間の通り
- ⑫ 市民病院前の南北のいちよう並木
- ⑬ 高知城（高知公園）と周辺の堀端
- ⑭ 追手筋から見た追手門と高知城
- ⑮ 高知城天守閣からの眺望
- ⑯ 藤並公園の将棋風景
- ⑰ 追手筋とその並木
- ⑱ 日曜市のある追手筋の風景
- ⑲ 追手前高校時計台
- ⑳ 廿代町（江ノ口川沿い）の街路樹
- ㉑ 大橋通の市場的風景
- ㉒ はりまや橋
- ㉓ 電車の走る市中の風景
- ㉔ 旧山内家下屋敷長屋と石畳の坂道

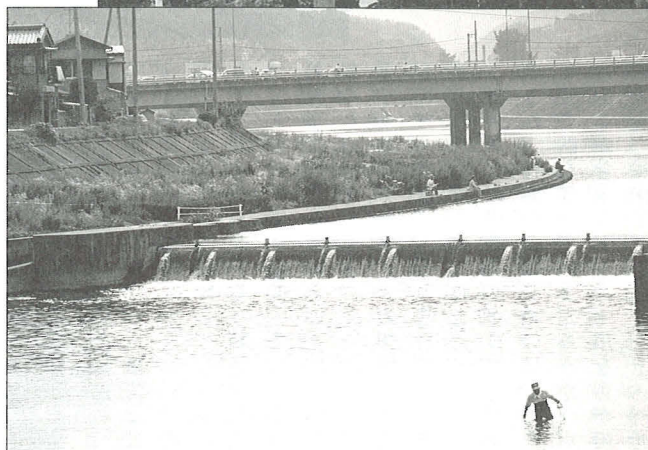
- ⑯ 朝峯神社と小富士山（介良富士）
- ⑰ 白水地区の家群
- ⑱ 五台山公園とそこからの眺望
- ⑲ 吸江寺
- ⑳ 竹林寺と庭園
- ㉑ 牧野植物園と結網山からの眺望
- ㉒ 吹井の里
- ㉓ 種崎・千松公園
- ㉔ 三里の造船所風景
- ㉕ 仁井田神社
- ㉖ 三里のビニールハウス群
- ㉗ 愛宕山（仁井田）からの眺望
- ㉘ 比島一旭町線の街路樹
- ㉙ 薫神社
- ㉚ 城西公園

- ① 円行寺・日吉神社
- ② 円行寺・ミズキ谷
- ③ つつじヶ丘団地東側の道路
- ④ セツ洲
- ⑤ 北山スカイライン
- ⑥ 三谷山観音堂と旧参道の地蔵
- ⑦ 名切川上流の蛍の里と一の谷
- ⑧ 大坂山
- ⑨ 土佐神社と社叢
- ⑩ 久万川と国分川の合流点
- ⑪ 石湍付近の町並み
- ⑫ 葛木男神社と社叢
- ⑬ 大津小学校前から見た舟入川周辺
- ⑭ 高天ヶ原
- ⑮ 鹿児神社周辺

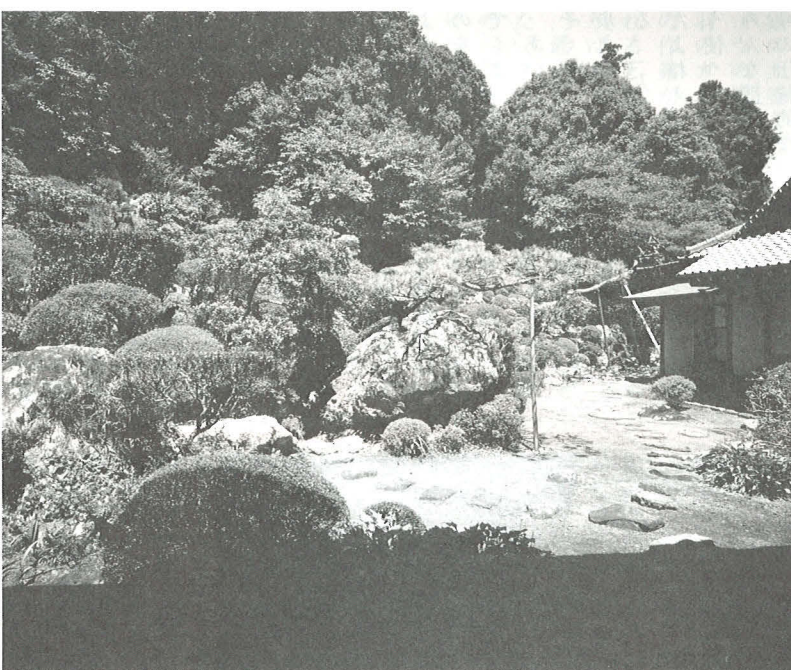
- ④ 山内神社の社叢
- ⑤ 鷹匠公園から県庁の並木と木曜市
- ⑥ フランク・チャンピオンの碑付近
- ⑦ 一文橋と県農工倉庫周辺
- ⑧ 江ノ口川下流の川沿いの道
- ⑨ 木屋橋からはね橋に至る水路風景
- ⑩ 魚の棚の町並み
- ⑪ 農人町の倉庫群と北光社移民団出航の地碑
- ⑫ 堀川の船だまり
- ⑬ 鏡川大橋
- ⑭ 中之島の棒堤
- ⑮ 丸山台
- ⑯ 弘化台の町並みと中央卸売市場
- ⑰ 小津高校正面のファサードと屋上のパラペット
- ⑱ 小津高校と高知大学教育学部附属幼稚園の間の小道
- ⑲ 若一王子宮と社叢
- ⑳ 寺田寅彦記念館
- ㉑ 城西公園西側の桜および楠並木
- ㉒ 大膳公園
- ㉓ 円満橋から見た上流の江ノ口川岸辺
- ㉔ 旧水通町の水路と火曜市
- ㉕ 旧築屋敷、鏡川沿いの景色
- ㉖ 潮江橋
- ㉗ 天神大橋と楠
- ㉘ 潮江天満宮と社叢及び梅園
- ㉙ 筆山
- ㉚ 筆山からの市街地・浦戸湾の眺望
- ㉛ 鏡川河口新田堤からみた風景
- ㉜ 孕東町日本セメント土佐工場埠頭周辺
- ㉝ 鷺尾山からの眺望
- ㉞ 横浜ニュータウン
- ㉟ ツツキ島と衣ヶ島・玉島
- ㊱ 御豊瀬の漁港風景
- ㊲ 雪隠寺とその森
- ㊳ 浦戸湾西岸の自然美
- ㊴ 若宮八幡宮と社叢
- ㊵ 長浜の防潮林と六体地蔵
- ㊶ 浦戸大橋
- ㊷ 桂浜
- ㊸ 針木浄水場周辺
- ㊹ 城山（朝倉）
- ㊺ 高知大学正門付近と縦の木
- ㊻ 朝倉神社と赤鬼山
- ㊼ 綾織洲
- ㊽ 宗安寺・大洲
- ㊾ 長畝峠と城ヶ森からの眺望
- ㊿ 朝倉堰と岩ヶ洲
- ① 鴻ノ森の遠景
- ② 旭浄水場の建物および水源池の丘
- ③ 井口町付近の水路のある風景
- ④ 玉水町の水路と旅館街
- ⑤ 蛸橋付近のせんだんのある風景
- ⑥ 郭中堰、鏡川トリム公園と鏡川緑地公園
- ⑦ 新月橋
- ⑧ 大規模農道春野線
- ⑨ 大成牧場



⑲ 追手前高校の時計台。明治に最初のものが創られて、形を変えながらも学び舎のシンボルとして親しまれている。



⑲ 郭中堰。東にはトリム公園や緑地公園が連なる。この辺りは一日的、釣り糸を垂らしたり網を打つ人、また散策する人の姿を見かける。



⑳ 竹林寺と庭園。この庭園は、17世紀に築造され、客殿前庭と小書院前庭からなり、全体として閑静な寺院庭園としての趣きを呈している。

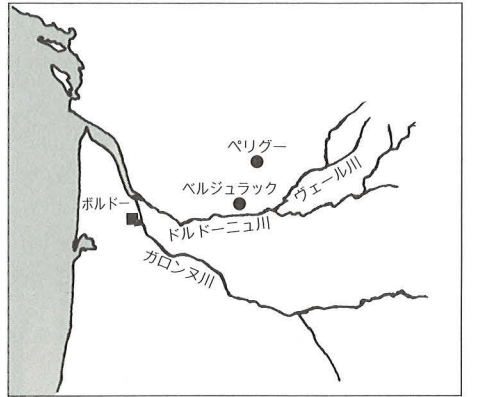
高知市わがまち百景 写真募集

『高知市わがまち百景』の本をみなさんとともに作りたく考えます。そこでこの本に掲載する写真を募集します。締め切りは8月31日。応募要領等、詳しくは高知市文化振興事業団にお問い合わせ下さい。

3 ボンヴェルさんの谷を訪ねて

小笠原 真一

フランス1周 1万キロ

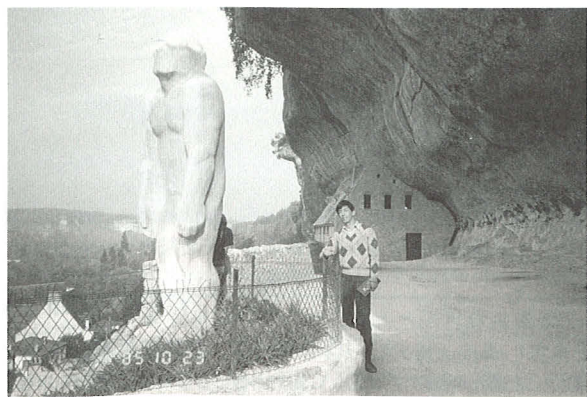


せっかく来たのだから伝統的なフ
ォウグラづくりを見ておきたい。そ
う思って宿の人に紹介してもらった
のが、ボンヴェルさんの家だった。
フランスは美食の国。そしてその
美食を代表する食物といえばやはり
なんとといってもフウォグラである。
トリュフとフウォグラの国ペリゴ
ールにやっつけてきて、そう思うのは、あ
まりにも自然な成り行きだった。
ラスコーの壁画とかクロマニヨン
人とか、世界史のはじめのほうにで
てくる話を覚えているだろうか。ポ
ルドーからドルドーニュ川をさかの
ぼると、やがて、シラノ・ド・ベル
ジュラックのベルジュラック。さら
に支流であるヴェゼール川の日本に
よく似た渓谷を上ってゆくと、レ・
ゼズィーという小さな町に出て、そ

の辺りを中心に、かの先史の人々の
洞窟群がある。
ボンヴェルさん夫妻の農園は、そ
のレ・ゼズィーとペリグー市（ペリ
ゴールの中心都市）を結ぶ街道の外
れの森の、谷の向こう斜面にあった。
ペリゴールは森の国。その森を抜け
る初秋の街道は、色づきはじめて紅
葉に飾られて美しく、やがて、これ
はと思うほどの狭い脇道に入り、木
から落ちた栗や林檎を「もったいな
い」を連発しながら踏みしだいて進
み、見通しが悪くこれといった目印
もないものだから、そのうち道がわ
からなくなつて、ついには近所の人
に尋ね尋ねして、ようやく入り口の
近くに近代的なコンクリート造りの
禽舎のある農家にたどり着いた。

夫婦と、犬と、カラスが一羽、私
たちを出迎えてくれた。巣から落ち
た雛を育てたのだというその鳥は、
よく慣れていて、私たちが敵でない
のを知ると、肩にも足にも、どこに
でもよくとまった。

あいさつを終えると、夫妻はさつ
そく私たちを禽舎に案内してくれた。
歩きながら、ご主人が説明してくれ
る。「入り口の所に飼育小屋があつ
たよねえ。モダンなやつ。あれはも
う使つてない。病気とかその他のい
ろんな問題が起こりやすいんだ。で、
今の伝統的なやり方にしたんだけど、



そしたら病気は起らないし、鳥も
すごく落ち着いている。結局こっち
のほうがいいんだよ」。
案内された禽舎は、木造藁ぶき、
壁も藁で、ところどころに塩化ビニ
ールシートをかけた、世にも恐ろし
げなるあばら屋である。禽舎なんて
言うよりは鶏小屋と呼ぶほうがより
ぴったりくる感じだけれど、それで
も、サイズはただの鶏小屋よりは一
回り大きく、内部を木柵でいくつか
に仕切つてあり、そのひとつとつ
に十五〜十六羽のガチョウが入つて
いる。この小屋は斜面を利用して張
り出すように建ててある。だから、

地面と床の間にはかなりのすき間が
できるわけだけれど、実はこれがミ
ソ。小屋の床はスノコになっていて、
ガチョウの糞やこぼれた餌は下に落
ちるし、穏やかな採光、通気、除湿
に効果がある。加えて、十分な高さ
のすき間があるものだから、落ちた
ものを、掃除屋の豚がもぐりこんで
かたづけける。

フウォグラは、暗い所に置いたガ
チョウやアヒルにフォース・フィ
ーディング（強制給餌）を施して作っ

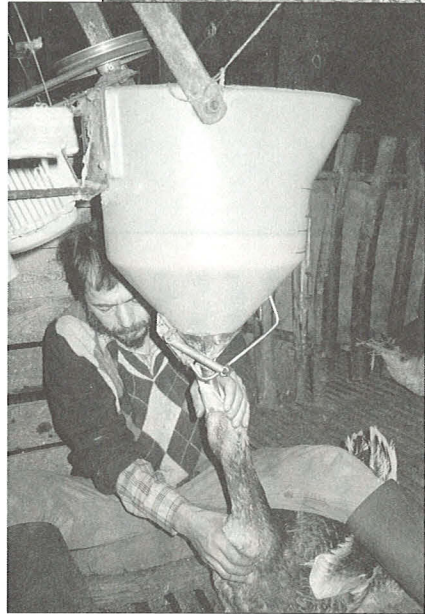
た、一個七〇〇gぐらいの、脂肪分
の多い肝臓のことである。その限り
では我々がプロイラーよろしく工場
的な生産方式が幅をきかせやすそう
にも思えるのだけれど、どうやらそ
の実、案外難しいもののようにある。
さて、ご主人がフォース・フィ
ーディングを実演して見せてくれた。
ガチョウへの強制給餌は胃袋にま
で達するかと思えるほどの長いノズ
ルのついた器具を用いて行なう。不
意に動いて鳥が傷ついたりしないた
めに、鳥を脚で押さえ、ノズルを深
く吞ませてスイッチを入れる。モー
ターが回り、餌を送り込まれ、ガチ
ョウの首もとがその餌で膨らむ。詰
まらせないよう優しくマッサージし
てやると、不思議なことに、ガチ
ョウの胃袋は、つぎつぎにその餌を吞
み込む。餌はゴエモン風呂みたいな

鉄の大釜で煮たトウモロコシとガチ
ョウの脂である。毎日何度も、数十
羽のガチョウの一羽一羽についてこ
の作業があるのだから、いい値で売
れるとは言つても、フウォグラづく
りは楽じゃない。
最後に少し農場を案内してもらつ
た。ここはまるで動物園。二十数頭
の、種類のちがう羊。放し飼いのア
ヒル。ガチョウ。昨日キツネに襲わ
れた鶏小屋には鶏。うさぎ。うずら
犬。猫。カラス。それに食いしんぼ
うの大家族、豚。

い食物でよく太る、効率のよい生き
物だからというのを、なにかの本で
読んだことがある。
ボンヴェルさんの農場では、ほと
んどが自給自足のような暮らしであ
る。がしかし、彼らには、山の中の
農夫夫妻というにはあまりにも教養
人らしい雰囲気があり、失礼とは思
つたが、自家製の少し酸っぱい李の
酒をいただきながら、少し立ち入つ
たことをきいてみた。
彼らのもととは教師だった。六
〇年代の終わりにパリからこの地に
やっけて来て、仲間とともに学校を開
いた。この国では、教師がいれば学
校を開くのは自由だという。フウォ
グラづくりはその運営資金を得るた
めにはじめたものだが、学校が挫折
して後も、彼らはこの地に留まり、
売りに出していた現在の農場を買い取
つて農業を続けているのだという。
「でも、そんなにも生活が変わつ
て、大変だったのじゃない」と尋ね
ると、「ンーン。そうでもない。動
物たちがするようにすればいいのよ。
すべては彼らが教えてくれるわ」と
奥さんは笑った。おそらくは五月革
命の戦士たち。カルチエラタンのパ
リケードは敢えなく消え去つたが、
しかし、心の中の皆は、ますます堅
固で、美しく磨きがかかっている。



右 木造藁ぶき、壁も藁でできた禽舎
下、フォース・フィードイングの実演



て見せてくれた。ア
ーティチョークの芋。
「今年は日照り続き
でこんなに小さいの。
もうすぐ食べ尽くし
てしまう。そしたら、
森に連れて行って栗を
食べさせるわ」。
ヨーロッパの貧し
い地方で、豚やガチ
ョウがよく飼われる
のは、それが、少な

（フランス料理店経営）

本来、 子どもは

東 森 昭

つらくて、悲しくて、おそろしくて

この四月、新しく三年生と出会いました。現在の子どもの典型的な弱さが、心配していた通り、アップパー・カット以上の強さで私をうちのめしてきます。まさに人類の危機。この様相は本校に限ったことではなく、それも、日々、おとなの「善意」という美名のもとにいつそう加速されて進行中なのです。

「宿題はないんですか」
「ないよ。しなければならぬこと、したら賢くなること——たとえば、教科書の次のところを勉強するとか」
「はい。それ、宿題ですか」
「宿題ということではないが、やったら自分のためにもいいというわけ」
「でも、それは宿題ですか」

求める。

二年生までは、毎日点検していたようだけれども、今も毎日たくさん忘れ物が続く。なぜ忘れ物をするのかときくと、お母さんが私に言うのを忘れていたから、と堂々と言う子さえいます。

「あす八時半から九時まで自習です。八時半から九時まで自習とノートに書きなさい。八時半から九時までですよ。ノートに書きましたか、八時半から九時まで」というふうには、実験として「八時半から九時まで」ということばを六回言い、「今、先生は、八時半から九時までということばを何回言いましたか」と子ども達にきいてみたことがあります。すると二回という子が大半、三回以上と答えた子は一人もいませんでした。

だから、私は行く

私は、つらいなあという思いでこれらのメモを書いています。これらを当たり前と思うおとなが多いから困るのです。

メモしながら、見てる、一年後には、探究心や挑戦欲旺盛、自分で情報を収集し、自己の判断で積極的に行動する子にしてやるぞ、とますます心を熱くするのですが……。

しかし、当面の労を要する多くの場面を考えると、ほんとは、「赤信号皆で渡ればこわくない」流れをも横目で見ることはあるのです。

その場面とは、プリントとかの明確な形のある宿題を出さないとか、犬の訓練のような反覆練習式の教育が少ないとか、自己点検（生活全面で）させることによるテストの点数の一次的低下とかの批判への対応。また、子ども達や私の周りから来る安易な生き方との対決等のことです。

「なんで宿題にこだわるんだ」
「宿題なら、やらんとお母さんや先生におこられるし、それに提出せんといかんろう」
「私はA中学校を受けるので、宿題をいっぱい出して下さい。お母さんも言っていました」
「自分が賢くなるために勉強するんじゃないか。人に命令されるより、自分で自分に命令してやったらどうだ」
「先生、ハンは」
「何のハンだ」
「連絡帳にハン」
「どういうこと」
「連絡帳がきちんと書いているかどうか、先生が見て、ハンを押して……」
「きちんと書けたかどうか、それくらい自分で確かめろ、ぬかってたらあしたわかる」

いつも縦割り班でのそうじ。今日は学級そうじ。ほうきを奪い合い、腕力の強い者が持ち、一部の者はそうじん。他に、隅で本を見ている者、言い上げに来る子。
「先生、私は何をしたらいいんですか」
「見回して考えてみる」
その子はそっと去って、大勢の中に埋没。
やがて机を後ろに寄せ、前半分を掃き、拭く。
「先生、前へ机を運んでもいいですか」
「掃くのも拭くのもすんだのか」
「はい」
「そしたら、あとどうしたらええのか」
給食中も、食べる物の順序、ごはんを汁をかけてもいいか、絶対残されないのか、等々あらゆることに指示を

雨上がりの日、三百人少々の学校のかさ立てに、五十本ものかさ残り、それがいつまでも減らないのです。このかさにしてしようちようされる「生き方」に私は注目しています。
ある母親は、「私ら車にいつでもかさを入れていますが、雨の用心のため、学校へかさを置くわけにはいきませんか」と抗議するように言いました。学級用のかさは七、八本。しかし、ある日突然雨が降り出したら、まさにこれを天の恵み。すばらしい学習の場になると思うのが……。

本来、子どもは

子どもは、好奇心、探究心、挑戦欲、正義感、行動力などの固まりです。ことばを使い始めた頃、這ったり歩いたりし始めた頃の子どもの思い出してみましよう。無限の未来を思わせなかつたでしょうか。

それが、おとなによって、いびつな成長の道を歩かされていくのです。一人っ子ないし二人っ子が私の学級では八十パーセント。その子らの一挙手一投足に親の目や口、手がべったり貼りついていて、学校では、先生がとてとても熱心に、形のあるもの、枠づけしたものだけ与え、そしてマンツーマン方式で口出し、手出し。かくして、子どもの世界はなくなっているのです。

こういうおとなは、大学の先生や教育評論家諸氏のおすすめ、「子どもの目の高さで」"全ての子に百点を"等々の論で、子どもを王様にしようし向けてきたのです。一現場教師の努力だけでも、子どもはある程度「生き返る」ことができます。しかし、大学の先生、評論家諸氏が大学入試（学問を選抜手段とする）や大学教育を裸にし、本気で批判されるならば、子ども達は人間に戻れるでしょう。
(南国市立日章小学校教諭)

土居 重俊著

付方言土佐日記 全訳注

最新刊 土佐日記

A5判 上製本箱入り 188頁 定価1,800円(税込)

「をどこもすなる……」の書き出しで知られる、紀貫之の土佐日記。これに、『高知県方言辞典』の編集等で土佐方言に精通している著者が、初めて土佐方言訳を施した。従来の注釈書の校異とともに、土佐方言を援用した合理的な解釈など、著者の長年にわたる研究の成果が生み出した、土佐人ならではの書。土佐日記解釈の決定版！

『図録・高知市史』発刊記念 高知市歴史講座

| | | | |
|--|--|---|--|
| 7月14日(金) 土佐の曙 岡本健児氏 <small>(高松短期大学教授)</small> | 7月20日(木) 土佐の古代探訪 前田和男氏 <small>(追手前高校教諭)</small> | 7月28日(金) 土佐の近世 広谷喜十郎氏 <small>(高知県立図書館郷土資料班長)</small> | 8月4日(金) 土佐美術の流れ 甲藤勇氏 <small>(土佐史談会理事)</small> |
|--|--|---|--|

〈会場〉高知市職員研修所(電気ビル4階) 〈定員〉50名
〈時間〉午後6時30分～8時30分 〈申し込み〉事業団まで電話または葉書で。各回毎にも
〈受講料〉300円(全4回分、資料代) 受け付けますが1回でも300円が必要です。

郷土に息吹く流儀を

美穂川 圭輔

五月に入ったある日、思いがけず寄稿のお話をいただいた。文筆とはまるで無縁に生きていたので、何を求められているのか定かではありませんが、私なりに判じてみますに、きっと土佐人の関心をひくような、新流創設という脱藩的な私の「歩きぶり」に目をとめられていることはなかるうかと思われれます。

日本舞踊の道に入って、今年で四十年にもなりましょうか。紆余曲折を経ましたけれど、特にここ最近の十年間は私にとって人生の大きな回り舞台であったように思われます。

この六月に発表の機会を持ちました文化教室『レディスクラブ高知』が誕生したのも、ちょうど十年前でした。大衆的な営みにこそ土佐の芸能・文化の発展を求めなければならぬ。そう考えるようになる事のスタートでした。

な流儀の世界とは別に、参加する人々の生き生きとした生活感、土の香り、汗のにおいのする民踊にも想いが移っていききました。爾來十年、伝統的な営みも大切にしながら、「土佐に根づき、より多くの人になじんでいただける新しい舞踊の道の創造」に意欲を燃やしてきました。四年前、「如水盈科」とでもいいでしょうか、諸々の想いを一点に凝縮させて『美穂川流』を創始しました。



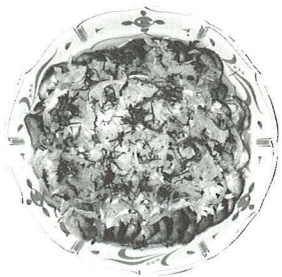
口はばつたい申し条ですが、土佐はもっともっと創造的な営みの出来る可能性を持っていると思うのですが……美穂川は、郷土に息吹く流儀として土佐のエネルギーを掘り起こす営みをしたと思います。元來踊りは、

一般の人々が嬉しいにつけ悲しいにつけ、本能的に手を振り足をならすことが発祥であったと思います。現在、世間の人々にイメージされている「日本舞踊は特定の人のもの」ということに、舞踏界自体問題を抱き、しきりに討論されておりましたものの、各々の修練の結果の発表の手段が、各種の伝統技術を要する総合芸術的な「舞台」であることにより、なかなか問題解決にならないのが現状でありましょう。とかく伝統というものは、大切であるが為らむつかしいし、むつかしいから伝統になるんだともいえます。美穂川は「自由」であります。この自由さの中にこそ、新しい土佐の文化を創造し、発展させていこうという営みの芽を見出すことができると考えています。人は環境をつく

楽しいもの様な気がする。本物は何一流とは、専門とはその基準は——人が歩けば道だという道も続けば伝統にもなる賭ける楽しみ賭けられる苦しみを通ることこれが我々の並ではない修練の場であり芸の本来である
(日本舞踊美穂川流家元)

キュウリ・ナス

露地野菜



関田 和子



『聞き書高知の食事』より

キュウリ・ナスは夏野菜の代表的なものだったが、ハウスなどで終年作られるようになって、そんな季節感は無くなった。現在、県内で生産されているキュウリ・ナスは主にハウスもので、出荷量は全国シェアの上位を占める。それに比べて露地ものは県内需要にも足らない。都会人の味覚には、独特の風味のある実のしまった露地ものより、味が淡泊で柔らかいハウスものが好まれる。しかし、塩で揉んだり、煮たりする伝統料理には独特の風味と実のしまった露地ものに限る。

ものにする旨い。また、今では田舎の良心市でしか見られなくなったキュウリに四葉というのがある。戦後間もなく中国から入って来たというが、30センチほどの細長いイボだらけのキュウリである。見てくれはあまり良くないが、歯ざわり、味、香りは抜群。いまはまぼろしのキュウリになった。

の古い品種が改良されたものが多い。露地ナスはハウスものに比べて実がひきしまつて色つきがよいからどんな料理にも向く。「秋ナスは嫁に食わずな」というが、秋口のナスの味は最高。嫁に食べさせたくないほどおいしい。昔、佐川では、この秋ナスを塩で漬けたのを「百漬」といって、これが日常の漬物だった。

一本のまつ毛

片岡 文雄

大阪環状線天王寺駅のプラットホームに、立ち食いのラーメン屋がある。ラーメンが出来上がるのを待つ間、私は、いくらかグレーをおびたホワイトのよく拭きとられたカウンタに、軽く目を落としていた。すると、わずかに五ミリほどだが、一本のまつ毛らしいものが、ぬぐい取られずに残っていた。

五十代も半ば、視力もとみに落ちていた私に、それがなぜ目にとまったのか。遠視が進んでいるからか。それにしてもこれほどに微細なものが、よく目にとまったものである。ともかく、それはまつ毛だった。なぜかそれを、私は、ひとりの女性になげなく指先で目をこすっていて落ちた、と想った。そうでなければならぬ、とも。その女性は三十代も後半、あるいはもう四十代だろう。人生の輪郭も

およそ固まっている。といっても、彼女には決してハッピーな光は射してはいない。十代の頃、中国地方も日本海側、または北陸、それに九州か、もしかしたら高知の過疎地から大阪に、生きる手だてを求めてやってきたのかも知れない。より真実に近い言い方をすれば、懐の深いこの混然の都市に流れついたのである。

そうして二十年余りが過ぎたのだ。彼女が深夜から夜明けにかけて、重い負担のこもる「仕事」をしている。それが終わって、けだるい身と心を運んで、このカウンターにたどりついた。私の想像はそういうことだった。なぜそうした不運な影を引きずる人間へと想像は傾いていったのか。それにはいくらかの事情がある。正確に言えば、私が天王寺駅のプラットホームにあるラーメン屋に立

ったのは、去る五月二十一日(日)の午前十一時近くであった。その午後には、この駅の上屋をなすステーションビルで、年刊のアンソロジー『大阪詩集』の終刊記念会が催されることになっていった。これまで七年にわたって七冊が刊行された。編集発行の任にあたっておられた詩人福中都生子さんには、私は初年度から寄稿ということだけでひ参加していただきたい、という厚遇を得ていた。そのお礼のため、七回行われてきた記念会に最初にして最後の出席をしたのだ。

スピーチを求められた私は、そのなかで、この巨大な胃袋になぞらえることのできる都市の役割と感謝を述べた。そもそも、大阪在住者でない自分たちが『大阪詩集』に誘われるということ自体に、大阪の得体の知れない許容性がある。詩作にかかわる者ばかりではない。今日の高学歴社会下にあっても、大卒者でなくとも、高卒、中卒者でも、大阪は労働の場を提供してくれるのである。知的生活者に大きい可能性を与えてくれる東京という巨大都市と、そこが異なる。わが高知から大阪に来て生活させてもらっている多数の人々に代わって、私はお礼を述べた。

大阪のそうした特性を背景にすることである。ただ、ともかくにも彼女は可能性を試みる場を得たのだ。ところが、彼女の背後には、過疎地にとどまり、仕事もこれといってなく、結婚の相手もなく、日に何度かは物陰に隠れてすすり泣く無数の女性が居るのだ。彼女たちには訴える相手さえ居ない。

沈下橋をわたる
道から深くおちこんだ
(中略)
川はひんやりとした目で
わたしを見あげている
右は、西土佐村在住の若い女性詩人大森ちさとさんの詩の一節である。四万十川を「日本最後の清流」とロマンの対象にだけ押し上げたのは、だれか。過去から現在へ、現在から未来へ、ほとんど暮らしの希望が見えてこない生活が、四万十のほとりに展開している。
私たちには、ゆたかな時代の底流にあつて、都市生活者に伝えるべき無限の真実を、日常的に宿している。ほかならぬ私自身、「まつ毛の女」の背後にうずくまる人々の心を丹念に詩作にすくい取ることを心がけているのである。

(日本現代詩人会員
日本現代詩歌館評議員)

私の風景

高瀬 允仁



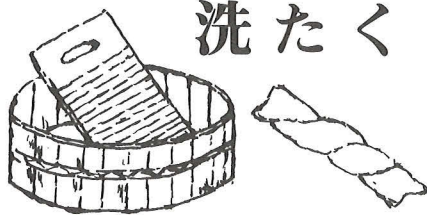
坂をバイクで一気に駆け上る。武家屋敷と石畳のコントラスト。木漏れ日が石畳に反射し様々な風情は、アスファルトにはない温かさがある。坂を上る人達の足元には、いつもこの石畳がある。

鷹匠町の石畳

洗濯機は昭和五年には既に製作販売されていたが、一般家庭に入るようになったのは二十年代後半から三十年代にかけてであり、高度経済成長期に入ると急激な普及を遂げた。電気洗濯機の出現により、女性は家事労働の一つ、洗濯から解放されたように思われた。かつて日本の村々では、川が、湧き水の周りが、水の得にくい土地では共同井戸の周りが地域の人々の炊事場であり、洗濯場であり、足洗い場であった。女たちは盥に汚れた物を入れ、洗濯板と固型の洗濯石けんを携えて、そこに出かけた。盥に水を張り、汚れた物を漬けておき、一枚洗濯板の上に広げ、汚れ目のひどい所に石けんを擦りつけては洗濯板で汚れを揉み擦る。よつにして落とすと再び盥の中へ。全部洗い終わるとねじり絞りをし、川辺だとか川に入つて流水で、井戸等の場合は盥の水を二〜三度替えてすすいだ。もちろん全てが手作業だったので、洗濯物が多いと小半日の大仕事であったが、集まってきた女たちは手を休めることもなく、子どものこと、嫁のこと、姑のこ

現代風俗を考える(2)

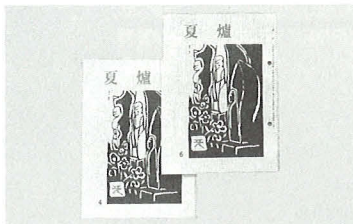
洗たく



と等話をした。時には生活の知恵を教え合い、噂話にも花を咲かせた。いわゆる井戸端会議で、地域の「ミニニケーション」の役割を担う一方で、女性のストレス解消の場でもあった。しかし、上水道の発達と洗濯機の普及により、洗濯場は各戸の風呂場や庭に移り、一つの大事な家事労働は片手間の仕事となり、女たちを社会的労働に駆り立てていった。その結果、あちらこちらの家で夜中にガラガラと洗濯機が回る。ほとんど汚れていないシャツも下口下口のくつ下も、白いものも色柄ものも、木綿も化繊もレースも何でも一緒に放り込み、洗剤を力ツプに一杯、後はボタンを押すだけ。汚れが落ちよつが落ちまいが、さすがに不十分だろうが、一回洗つて二回すすぎ脱水したら出来上がり。過労気味の女たちは、終了のピーピーという電子音に呼ばれ立ち上がる。電気洗濯機は女性を洗濯労働から解放すると同時に、女たちのストレス解消の場としての井戸端会議をも奪い去ってしまった。

四五十号を突破して

高橋 柿花



月刊俳誌「夏炉」は、昭和二十六年八月第一号を発行して現六月号で通巻四十三号を数える。高知には世代交替の古い俳誌はあるが、単独個人で四五〇号を突破したのは夏炉がたまた一誌である。

夏炉は虚子を師系に、虚子の懐刀の深川正一郎に師事し、虚子亡き後は正一郎の進言もあつたがホトトギスを去り、石田波郷主宰の俳誌鶴に参加した。実力のある波郷に赤斧を仰いだ。昭和四十一年鶴同人に委嘱され、現在鶴飛鳥集同人・俳人協会評議員となり、高知俳壇の責の一端を果たしつつあり、今後も出来るだけ努力を惜しまぬつもりです。

夏炉の足跡を残す為に、昭和五十一年三〇〇号を記念して会員合同の句碑を鏡ダム奥の井の口山に建立し、昭和六十二年の四〇〇号の時には、虚子歳時記季節配列順に従って記念合同句集(五三〇頁)を発刊、会員全員に配布した。

次は四十周年記念を何かせねばと考えている昨今である。

夏炉の句作指導は、あくまで有季定型を守り、個性を尊び個性味豊かな俳句作家を育てることをモットーに頑張っており、作品集は七句投句栞花選、ひこばえ集は五句投句芽童選で句作の成果を充実させている所。角川受賞作家松林朝蒼も指導に協力して頂いている。月三回の句会で鍛錬し、県下唯一の連句の指導もしている。

連絡先 高知市曙町一―二八―三五 (夏炉主宰) 四四―〇四―〇九(高橋)

朗読サークル「十五人の会」

自分の話し方を生かして

池沢 潤子

朗読サークル「十五人の会」は、市民学校朗読入門講座OBの集まり。一九八四年朗読講座が終わる頃、講師の植田省三先生から、引き続き教えて下さるとのお話があった。それで十五人が集まってこの会が生まれた。メンバーは入れ替わったが、今は会の名前の通り十五人。

盲人ボランティアをしたい、孫に童話を聞かせたい、話が苦手……と動機もいろいろなら、レベルもいろいろ。しかし、先生はその人その人に合わせて教えて下さる。時には、感動した本や映画の話に夢中になられ、朗読の時間が少なくなるが、それもまた楽しい。

ふだん話すように声を出せばいいから、朗読は簡単な筈。ところが、これができない。日常生活で言葉が無意識に使っているのに気づく。聞き手に内容を分かるように伝えるためには、自分が分からないとできない。言葉遣いを考え、言葉を大事にしなさいと朗読はよくならない。気持ちよく声を出すこと、自分の話し方を生かして語ることのむずかし



さを、身にしみて味わっている。今まで斉藤隆介の童話「プラテロと私」「にぎりえ」「夢十夜」を、各一年かけて練習し、発表会を開いて人に聞いてもらった。今年五月から「平家物語」に挑戦。不安だったが、依國猪舎の鐘の音と声を張ると気持ち良く、声も大きくなり酔える。発表会を目指して今日も楽しく声をだしている。

連絡先 高知市高須五〇四―三三七 八三―九八―〇二(池沢)

とさやきの会

土佐の焼物

佐竹 正敏

土佐の焼物は、今から約二千年前、土佐山田龍河洞の山麓地帯で、原始人が弥生式土器を数多く焼成したことに始まり、新改村近には、奈良・平安、鎌倉期の窯跡が発見されるなど、この地域に古代文化が栄えたことがうかがえる。中世戦国時代には、朝鮮出兵時に連れ帰った陶工による施釉陶器が残され、江戸時代に入ると、久野正伯が招かれ土佐藩お庭焼の尾戸焼が始まり、中期以降には、内原野焼、鹿見焼、田野焼なども興った。

戦後の土佐の焼物は、故田所芳秋先生(県工業試験場場長)により復興指導が行われ、また茶屋道拙氏や久武繁亀氏ら多くの陶芸家の指導援助と相まって、今日の土佐焼物の復興の礎となった。

土佐焼は、茶屋道拙氏や、氏に師事した陶芸家たちによって、広く土佐の焼物として再興され、日用雑器、茶陶、美術品などを焼成し、県内の陶芸家に受け継がれている。

「とさやきの会」は、高知県陶芸作家協会を母体とする同好者によって一九七六年に結成され、陶芸文化の発展をめざして草の根運動を続けており、県内各地で作陶する陶芸家の研究、交歓の場として、その窯数二十数窯を数え、昨年は「土佐焼一六人展」を開催するなど、陶芸文化の振興に努めている。なお、とさやきの会は、趣味、業を問

わず陶芸にかかわる県内同好者の集いで。多方のご参加をお待ちしています。

連絡先 高知市前里三三六―三三 七五―一六七九(佐竹)



民族文化映像研究所の映画をみる会

日本の基層文化を考える

馴田 正満



「民族文化映像研究所(民映研)の映画をみる会」が活動をはじめ、この七月でちょうど一年になりました。

この会は、民映研が日本各地に残っている基層文化を映像(16ミリフィルム)で記録したものを、定期的に鑑賞していただくというものです。今年4回の上映を計画していますが、年間4回通しの券の購入者を会員とするシステムをとっています。

これまで、次のような作品を上映してきました。「沙流川アイヌ・子どもの遊び(春から冬へ)」「歩け三郎(周防猿まわしの復活)」「秩父の通過儀礼」「椿山(焼畑に生きる)」「イヨマンテ(熊おくり)」etc.

また映画をみるだけでなく、民映研所長の姫田忠義氏を招いて、講演会も行なっていました。今は消えつつある風習、風俗そして取材する中でエピソードなど大変興味深い話を聞くことができました。今後は、七月に「衣の生活技術を考える」をテーマに「からむしと麻」「菴美の

泥染」、十月に「子育てを考える」をテーマに「沙流川アイヌ・子どもの遊び(冬から春へ)」「甌島のトシドン」を上映していく予定です。上映会は、高知市民図書館や高知市立中央公民館などで行っています。鑑賞券を購入すれば誰でも参加することができます。また誰でも会員になります。興味のある方、どしどし参加下さい。

連絡先 高知市長浜四七五 四二―二八八―一(松吉恵子)

散歩の途中で



国道56号線、荒倉トンネル手前数百mの所にこの碑は立っている。「ここに新しき道なる」の字は故氏原一郎氏の手によるもの。国道から土佐道路下針木バス停辺りに抜ける道が4mに増幅されたのを記念して昭和37年に大谷部落が建てたもの。数十m幅の道路が当たり前になってしまった現在、4m幅の道の完成にこれ程りっぱな碑が立てられたことに当時の道路事情がうかがえる。

風伯

シバテン像の建立を

月のやや陰ったうす明かり、おどろおどろした川辺の茂みからひよいと土手へ躍り出て、朝帰りに近いヨータンボ(酔客)に愛嬌たっぷりに話しかける。「オンチャン、相撲とろ」。それが必ずしも相手がヨータンボにかぎらないのがシバテンの妖怪たるゆえんか。オンチ

ヤンがその挑発に乗って、翌日、太陽が昇るまでからだ中血だらけにして並木の松と格闘していたという土佐の民話もこのごろはあまり耳にしなくなつた。もともとシバテンの民話は、東は芸西村和食から幡多郡まで土佐のあちこちに伝わって

いたという。オンチャンの馬鹿さ加減や酔狂はさて置き、シバテンの明るく楽天的なのがよい。自然児なのがよい。シバテンは水泳が達者で相撲が強い。この二つは土佐の青少年の得意なスポーツであった。シバテンがガキ大将とすれば、坂本龍馬やオリンピックの北村久寿雄もまた、シバテンの変身かもしれない。それに自然いっばいの環境だった。鏡川をもう元へ返すことはできないが、堤はコンクリートに固められながらも、流れは江ノ口川のようなコーヒー色にはなっていない。筆山はあり、天満宮の大クスノキもある。その残っている自然美と人工美の調和こそが中都市の都市造りでなければならぬ。シバテンは英雄ではない。例えばヨロツバの小僧小僧のようにラックスし、しかも活力あるシバテン像の建立は、自然を守る象徴とはならないか。(鏡川のカキ)



元吉恵子先生を迎えて オペラと合唱を楽しもう

ピアノ伴奏 住友弘一先生

(高知女子大学保育短期大学部助教授)

元吉恵子先生のユーモアあふれるご指導のもとに、本場イタリアのベルカント唱法を学び、思いっきり声を出してみませんか。

当日は、元吉先生の本格的なオペラのアリアも演奏していただく予定です。

日時 8月5日(土) 14:00~16:30

場所 高新文化ホール

定員 申し込み先着200名

参加費 1,000円

※会場での練習曲は、A・スカララッティ作曲

「Gia il sole dal Gange (ガンジス川に太陽がのぼり)」です。

-----講師のプロフィール-----

南国市出身。作陽音楽大学第1期卒業。
昭和47年 イタリアに留学(~54年)。オペラの殿堂スカラ座研究生として学ぶ。
昭和51年 第1回モンテプルチャーノ国際フェスティバルに於いてデビュー以来、数々の演奏会に出演。
昭和53年 藤原歌劇団高知公演にて、「蝶々夫人」を歌う。
現在、作陽音楽大学助教授。

第4回

こどもの本を語る 高知大会

- 7月23日(日)
- 潮江市民図書館3階
- 講演 上野 暎氏
(同志社女子大学教授)
- 協力券 500円
(市民図書館、事業団、子ども劇場にて取り扱っています)

じかん 9:00~ 受付 ● 9:30~12:30 分科会 ● 13:30~15:30 講演

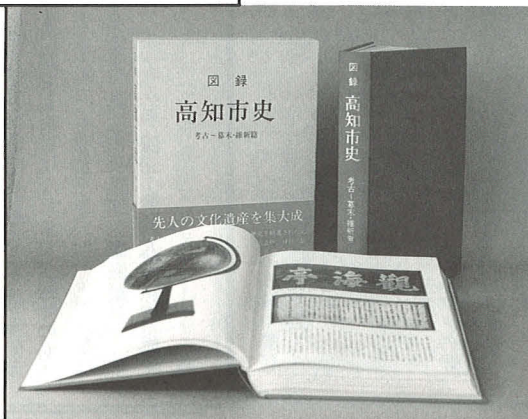
- A4判・四三一頁
- 上製クロス装丁・函入
- 総写真点数五六二点
- 解説一五六項目
- 定価二五、〇〇〇円
- 編集/助高知市文化振興事業団
- 発行/高知市

高知市制一〇〇周年記念出版

図録 高知市史

考古・幕末・維新篇

考古から幕末・維新までの高知市の文化遺産を集大成。考古遺物、神社・仏閣、仏像、書画、古文書、陶磁等の史料を精選網羅した図録の決定版。だれでも楽しみながら読める通史型図録。



財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL(〇八八八)⑦四三六五
郵便振替 徳島8-14869

定期購読の賛助会員募集。年会費2,000円(年6回郵送) 事業団主催事業の入場券や出版物の割引等の特典あり。